

# 日本書紀が伝える壬申の乱

——その記述、所伝の成りたちを探る——

榎 本 福 寿

- 一、歴史事実と歴史描写
- 二、凱旋にあたる「御島宮」
- 三、近江京離脱直後の「御島宮」
- 四、歴史劇の開幕と閉幕
- 五、対比的な記述の構成——戦い準備の段階
- 六、対比的な記述の構成——開戦直前の段階
- 七、対比的な記述の構成——攻撃開始の段階
- 八、不破の天皇に対する倭京の吹負
- 九、倭京を本営とする防衛戦
- 十、神懸りと戦いとの対応、その一
- 十一、戦局を転換する勇者の活躍
- 十二、神懸りと戦いとの対応、その二
- 十三、壬申の乱をめぐる所伝の構成

日本書紀は、巻二八に、古代史のなかでもとりわけ名高い壬申の乱の一部始終を刻明につたえている。歴史的事実という点でも、その記述の内容は、一般に真憑性が高い。

しかし、そうした見解に確かな裏付けがあるわけではなく、むしろたとえば出典を基に脚色した記述などは、一部にとどまるとはいえ、従来の見解を疑わせる。それらは、歴史的事実をありのままつたえることより、明らかに歴史の描写に力点を置いている。

その歴史の描写の実態を、壬申の乱全体の記述を対象に、可能な限りの確な読みを通して説明することを本稿はめざす。それにより、壬申の乱をめぐる記述が、事態の進展にそくした意図的な構成から成り立つこと、島宮、倭京などを中心に神懸りがそこに重要な位置を占めることなどを明らかにした上で、壬申の乱の記述の成り立ちに迫る。

## 一、歴史事実と歴史描写

壬申の乱は、天武天皇を誕生させたまぎれもない歴史上の事件である。政治に限っても、天武朝は「天武、皇后による排他的な共治体制」<sup>①</sup>をとるなど、新時代の幕を開けただけに、その意義は極めて大きい。勿論、いくつかの文献がこの乱に関連した記録をつたえている。なかんずく詳細な内容をつたえるのが日本書紀である。三十巻のうち、巻二八全体をそれにあてる。なおまた、日本書紀の完成・奏上が養老四（七二〇）年だから、乱勃発からたかだか四十八年しか経過していない。編纂を始めた頃にまで溯るならば、いつとは特定できないものの、なお生々しい記憶や体験にもとづく回顧談を直接耳にすることも稀ではなかったに違いない。

それだけに、壬申の乱をめぐる日本書紀所伝に寄せる信頼の度合、すなわち歴史の事実をありのままつたえているといういわば歴史的信憑性の程度が一般に高い。試みに先学の主だった見解を挙げてみるに、右にあらまし指摘したとほぼ同じ内容をもとに、直木孝次郎氏「壬申の乱」<sup>②</sup>は「『書紀』の記載はかなり信頼してよいと思われる。」（5頁）と説き、さらに西郷信綱氏「壬申紀を読む」<sup>③</sup>にいたっては、所伝の内容にも言及した上で、

（大伴吹負の敗戦、逃走の記述は）壬申紀が事実<sup>④</sup>に忠実であつたしるしと思える。かくてこの巻は、書紀中もっとも事実性に富む部分だと断定できる。そしてもし記述の歴史という命題がなりたつとすれば、これは書紀のなした一つの画期的達成であつたといつて過言であるまい。（8頁）

右のようにほとんど手ばなしで賛えてさえている。こうした言説に従うかぎり、日本書紀の記述に歴史の真実を探ることに、恐らくなら抵抗も無いのではないか。

さて、しかしたとえ同時代の記録としても、それだけでは、そこに事実をありのままつたえていることには決してならない。まして、壬申の乱に勝利した側の手になる所伝である。事実に対する恣意的な解釈や誇張をはじめ、歪曲さえ皆無とはいえないはずなのだが、この点についても、概して配慮は十分ではない。たとえば直木氏前掲書でも、さきに引用した一文の直後に、次のように説明を加えるに過ぎない。

ただし、編者舎人親王は大海人皇子の子であり、時の天皇元正は大海人の孫であるという関係からいって、大海人に不利な史料が採用されていないことは十分考えられる。（5頁）

「不利な史料」の不採用は、とりもおおさずその史料が事

実をつたえているという前提に立つ。しかし、その前提に根拠があるわけではない。それどころか、なかには、事実より、むしろ歴史を描くことに力点を置く記述さえある。

たとえば脚色を施した跡の著しい、いわゆる出典をもつ例がある。それと明らかなのが次の一節である。

時、大友皇子及群臣等、共營<sub>二</sub>於橋西<sub>一</sub>而大成陣、不見<sub>二</sub>其後<sub>一</sub>。旗幟蔽<sub>レ</sub>野、埃塵連<sub>レ</sub>天。鉦鼓之聲、聞<sub>二</sub>數十里<sub>一</sub>。列弩乱発、矢下如雨。

よく知られているように、『後漢書』（卷一上）「光武帝紀」の記述を、この一節はほとんどそのまま利用している。実際に照らして不自然な表現については、たとえば、

軍陳<sub>二</sub>數百里<sub>一</sub>、不見<sub>二</sub>其後<sub>一</sub> ↓ 大成陣、不見<sub>二</sub>其後<sub>一</sub>

鉦鼓之聲、聞<sub>二</sub>數百里<sub>一</sub> ↓ 鉦鼓之聲、聞<sub>二</sub>數十里<sub>一</sub>。  
こうして改変を加えて繕う。それは、しかし表現上の部分的手直しにとどまる。事実をつたえることをなによりも優先する姿勢は、ここに認むべくもない。

それにかわって、歴史の描写それじたいに強く関心をよせていたことは疑いをいれない。漢籍の記述の借用は、その一つのあらわれに過ぎないであろう。もとより、実際にはそれだけにとどまるはずもなく、史料の取捨選択のみならず、記述そのものにも、たとえば脚色や改変、はては創

作にまで及ぶ意図的な操作を加えていた可能性さえ否めない。また一方、その記述によつて壬申の乱を描くとすれば、乱をめぐる所伝の展開あるいは構成に、事実をつたえるとは別の意図がはたらくはずでもある。その意図、あるいは意図的な操作のその内実を、あくまで記述の読みを通して解明することが、さしあたり小稿がめざすねらいである。その作業は、卷二八の所伝のそもその成りたちの解明にもおのずからつながる。どこまでも実証に徹しながら、まずは所伝の意図を探ることを試みる。

## 二、凱旋にあたる「御島宮」

九月己丑朔丙申、車駕還、宿<sub>二</sub>伊勢桑名<sub>一</sub>。丁酉、宿<sub>二</sub>鈴鹿<sub>一</sub>。戊戌、宿<sub>二</sub>阿閉<sub>一</sub>。己亥、宿<sub>二</sub>名張<sub>一</sub>。庚子、詣<sub>二</sub>于倭京<sub>一</sub>而御<sub>二</sub>島宮<sub>一</sub>。癸卯、自<sub>二</sub>島宮<sub>一</sub>移<sub>二</sub>岡本宮<sub>一</sub>。

天皇（即位前だが、本文中の表記に従う）は、壬申の乱に勝利したあと、一月半ほど不破宮に留まる。それにひき続き、「車駕還」以下に帰還をつたえるのが右の一節である。途中いくつかの宿泊地を経て、最終的に到達した先が倭京の島宮である。勝利して帰還するのだから、実際にはいわば凱旋にあたる。それにもかかわらず、肝心なその記述「詣<sub>二</sub>于倭京<sub>一</sub>而御<sub>二</sub>島宮<sub>一</sub>」は、あまりに素っ気ない。凱旋をいささかも彷彿とさせないが、これと対照的な

が古事記の序文（上表文）の一節である。同じ帰還について、それは次のようにつたえている。

乃放<sup>レ</sup>牛息<sup>レ</sup>馬、愷<sup>レ</sup>悌<sup>レ</sup>歸<sup>二</sup>於華夏<sup>一</sup>、卷<sup>レ</sup>旌<sup>レ</sup>戢<sup>レ</sup>戈、儼<sup>レ</sup>詠<sup>二</sup>停<sup>二</sup>於都邑<sup>一</sup>。

中国古代の聖王である周の武王の故事にのっとり、壬申の乱を、悪政を除く聖戦になぞらえ、その勝利に心なごんで喜びながら都に凱旋するといったさまを描く。事実より、むしろ理想を描くことを通して、乱を勝利に導いた天皇じしんを理想的な聖王として称える意図が著しい。凱旋を、理想的な聖王像の描写に巧みに生かしている。

古事記が描くこの凱旋とも理想化とも無縁なのが、日本書紀のくだんの記述である。地味に徹しているだけに、事實はむしろこちらにあるのではないかといった思いを誘う。それにしても、あまりに素つ気ない反面、「御<sup>二</sup>島宮<sup>一</sup>」を委細にみると、必ずしもそうとばかりはいえない。卷二八には、それと全く同じ表現の例がもう一つあり、彼此二例のたがいに分ちがたいかわりについては後に言及するとして、さしあたって問題となるのが「御」である。それには、もちろん凱旋の意味などありえない。たとえば『漢語大詞典』は「指皇帝临幸至某处」と説明して「天子親御<sup>二</sup>前殿<sup>一</sup>、召<sup>二</sup>公卿議<sup>一</sup>。」（漢書・王商伝）を例示するが、「御」はこれにあたる。日本書紀の該当する用例を、卷二

八の前後の巻に限ったなかから拾いだして次にしめす。

○天皇御<sup>二</sup>大極殿<sup>一</sup>。古人大兄侍焉。（皇極天皇四年六月条） ○天皇御<sup>二</sup>子代離宮<sup>一</sup>。（孝德天皇大化二年正月是月条） ○天皇御<sup>二</sup>蝦蟇行宮<sup>一</sup>。（同八月是月条） ○皇太子御<sup>二</sup>長津宮<sup>一</sup>。以<sup>二</sup>織冠<sup>一</sup>授<sup>二</sup>於百濟王子豐璋<sup>一</sup>。（天智天皇即位前記） ○天皇御<sup>二</sup>西小殿<sup>一</sup>。皇太子・群臣侍<sup>レ</sup>宴。（同十年五月条） ○天皇御<sup>二</sup>島宮<sup>一</sup>。宴之。（天武天皇五年正月条） ○大設<sup>二</sup>齋飛鳥寺<sup>一</sup>以<sup>レ</sup>誦<sup>二</sup>一切經<sup>一</sup>。便天皇御<sup>二</sup>寺南門<sup>一</sup>而礼<sup>二</sup>三宝<sup>一</sup>。（同六年八月条） ○天皇御<sup>二</sup>于向小殿<sup>一</sup>而宴<sup>二</sup>王卿於大殿之庭<sup>一</sup>。（同九年正月条） ○天皇御<sup>二</sup>向小殿<sup>一</sup>而宴之。（同十年正月条） ○天皇御<sup>二</sup>于大極殿<sup>一</sup>以<sup>レ</sup>詔<sup>二</sup>川島皇子<sup>一</sup>（以下略）、令<sup>レ</sup>記<sup>二</sup>定帝紀及上古諸事<sup>一</sup>。（同三月条） ○天皇御<sup>二</sup>于東庭<sup>一</sup>。群卿侍之。（同十三年正月条） 最後に挙げた例には、直後に「時召<sup>二</sup>能射人及侏儒<sup>一</sup>、左右舍人等<sup>一</sup>射之。」という一節がつづく。「東庭」はこの射をおこなう場であり、時代をはるかに遡る清寧天皇四年九月条に「天皇御<sup>二</sup>射殿<sup>一</sup>。詔<sup>二</sup>百寮及海表使者<sup>一</sup>射<sup>二</sup>。」とつたえる「射殿」に通じる。いわば儀礼の場だからこそ、「御」をつかう。挙例したなかに饗宴が多いというのも、その儀礼的性格によるであろう。右に列挙した皇極紀から天武紀（の半分）までの例のそれぞれ前と後に、なおいくつ

該当するものがあり、ましてそれらを含む用例の全てについて裏が取れるわけではないけれども、全体を通して、天皇（天智天皇即位前紀の例に限っては、摂政の皇太子）が政治的行為を執りおこなうかもしくは儀礼等を催すかなどの特定の場を対象とするといった顕著な特徴を「御」はもつ。「幸」との違いも、たとえば「幸紀溫湯」（斉明天皇四年十月条）というようにそれが対象を限定しない点に著しい。

くだんの「御島宮」は、こうした「御」をめぐる特徴的な用例の一つにほかならない。もともと、巻二八には、そのかたちをとるものとは別に、「御」の用例がもう一つある。他に類をみない場を対象とする例なので、内容に立ちいってみるに、

高市皇子遣使於桑名郡家以奏言「遠居御所、行<sub>レ</sub>政不<sub>レ</sub>便。宜<sub>レ</sub>御<sub>二</sub>近処<sub>一</sub>。」即日、天皇留<sub>二</sub>皇后而入<sub>二</sub>不破<sub>一</sub>。

高市皇子の傍線部にいう要請に従って天皇は「入<sub>二</sub>不破<sub>一</sub>」という展開上、「近処」とは、この「不破」を指す。のちには、大伴吹負が乱の緒戦に倭京で近江方の武器庫を奪った上に高坂王と稚狭王とを軍に従わせるといった武功をあげ、これを報告に向かわせた先を「不破宮」という<sup>十九</sup>。天皇がそこで戦争の指揮をはじめ軍政を執りおこなっているこ

とによるが、その執政者、すなわち後に天皇となるべき者として臨むことを要請したというのが、右の一節の傍線部にいう内実である。

この「近処」を対象とする例ですら、「御」をめぐる表現の類型をふみ外してはいない。同じ巻にあり、まさに類型にのっとった表現から成るくだんの「御島宮」が類型どおりの内容をあらわすことは、ほとんど自明であろう。げんに、「御」の使用したにかぎれば、即位前にもかかわらず、「天皇」はおろか、「朕」「詔」「奏」などの天皇に専用する語をつかうことに鑑み、これらと同じように天皇と同等の扱いを巻二八を通じて一貫させていることと軌を一にする。また一方、「島宮」にしても、元来その名号をもつ宮があつたわけではなく、前述のとおり「不破」を、そこで天皇が軍政をおこなうことをもって「不破宮」と呼称すると同様、天皇の「御」にそくして「島宮」の名号を使ったはずである。

### 三、近江京離脱直後の「御島宮」

その点では、さきに凱旋にあたる例を優先して採りあげたけれども、巻二十八に二例あるうちのむしろ初出の例こそが実は重要である。この例を巡っては、問題も若干ある。

<sup>十九</sup>壬午、入<sub>二</sub>吉野宮<sub>一</sub>。時、左大臣蘇賀赤兄臣・右大臣

中臣金連及大納言蘇賀果安臣等送之、自菟道<sup>二十日</sup>返焉。

或曰「虎着翼放之。」是夕、御<sup>二十日</sup>「島宮」。癸未、至<sup>二十日</sup>吉

野<sup>二十日</sup>而居之。

天皇が天智天皇の聴しを得て出家した上で大津京を辞去した当日および吉野入りしたその日の動きをつたえる記述である。壬申の乱の勃発はこのおよそ八ヶ月後だが、天皇が大津京を離れ自由を得たまさにそのことにそくして「虎着翼放之」といい、乱勃発の懸念がもはや現実のものになろうとする状況をそれは暗示してもいる。この状況と、もちろん、「御<sup>二十日</sup>「島宮」」が無縁であるはずはない。

念のため付言すれば、「御<sup>二十日</sup>「島宮」」は前述したとおりそれ独自の意味をもち、吉野入りの途中立ち寄るの「過」ないし宿泊の「宿」などではなく、その他「入」「至」「往」「居」等とも異なる。こうした違いに、従来はほとんど関心をはらわれない。たとえば直木孝次郎氏は、大津京から島宮までの距離が七十キロを越え「一日の行程にしては、かなりの強行軍である。」と説き、そのことをめぐって次のように指摘する。

『書紀』は「夕」についたと記すけど、恐らく途中で冬の日は暮れはて、夜道をかけて嶋の宮に辿りついたであろう。一行が急ぎに急いだのは、いうまでもなく近江側の討手が追撃をかけてくることを恐れたから

であろう。(前掲書69頁)

「御」ではなく、「夕」に着目する。しかも、その記述より、むしろ行程(距離)や時期(冬期)をもとに類推して、天皇の懸命な急行理由に、「近江側の討手が追撃をかけてくることを恐れたから」を挙げてもいる。

七十キロを越す距離だとすれば、大人でさえ、休みなしに歩いて十八時間にかかる。まして草壁・忍壁の幼い二人の皇子に加え、「女孺十有余人」を連れ、左大臣蘇我赤兄をはじめ近江朝廷の高官が一行見送りのため宇治までつき従ってもいる。たとえ「急ぎに急いだ」としても、實際上、

「是夕、御<sup>二十日</sup>「島宮」」には相当な無理が伴う。また一方、そうして急いだところで、「追撃」をうければ、幼い皇子や女孺たちを連れた一行がそれから逃れられるはずもないが、むしろそのこと以上に、天皇の出家を天智天皇みずから聴した上で、吉野へ旅立つ一行を蘇我赤兄らにわざわざ見送らせたのだから、少なくともその当時さし迫った「追撃」の危惧をいなく状況にはない。現実には近江方の敵対的行動が目立ち始めるのは、天智天皇の崩御した翌年の五月になってからである。

さて、「追撃」のほかにも、外的要因などなんら見出しがたいばかりか、無理を押しつけて実現が可能なものだとすれば、「是夕、御<sup>二十日</sup>「島宮」」を、純粹にそのことだ

けをめざしてただひたすら道を急いだ結果とみるほかない。確かに、それは尋常なことではない。しかし天皇の超人ぶりを強調するというより、「虎着翼放之」という乱勃発の懸念がもはや現実のものとなろうとしている状況を暗示する一節の直後にあり、この状況と無縁ではないはずだから、むしろ壬申の乱といういわば歴史劇の幕開けを告げるものではなかったか。このあとに続くはずの劇の展開がさき延ばしになっている上に、吉野入り当時、天皇みずから舍人に向かって「我今入道脩行。故随欲脩道者留之。若仕欲成名者還仕於司。」と二度までも告げた事実が、幕開けをいつそう曖昧にしてもいるけれども、それはどこまでも表向きの事実にすぎない。実際は、そして実質の上では、近江方に向けた天皇の韜晦としての意味あいがつよい。

#### 四、歴史劇の開幕と閉幕

もつとも、歴史劇の幕開けを告げるとはいえ、そのことを天皇が明確に認識していたということには必ずしもならない。くだんの「御島宮」にたちかえつていえば、あくまでも歴史の記録としてそのかたちをとるにすぎない。実態としては、直木氏のいう「急ぎに急いだ」末に旅装も解かずそれこそ疲れきって島（莊）の地の宿舎に転がり込

んだ可能性が高いが、記録がつたえる歴史は、その実態などではなく、到着したというそのことにそくして、上述のとおり天皇たるべき者がそこに臨むかたちをとる。問題は、壬申の乱に勝利したあとと倭京に帰還した際の、それらしくはないけれども、ともかくも凱旋にあたる行動とそれが一致する点である。

この問題は、歴史劇の幕開けを告げることにたぶんにかかわる。ごく単純には、壬申の乱をめぐる、これに勝利して凱旋したという結末は歴史劇のいわば閉幕にあたり、開幕と閉幕との対応をはかったものとみることができる。

この対応では、凱旋という閉幕を、開幕そうそのその当初すでに予見ないし先取りしていたことになる。また一方、閉幕にそくしていえば、歓呼に沸く凱旋などではなく、大津京からようやくにして逃れてきたそのいわば原点に立ちかえることを意味するであろう。これらは、しかしどこまでも一つの解釈にとどまる。開幕・閉幕のいずれもが「島宮」を舞台とすること、言いかえれば、実質上、歴史劇はまさしくそこを舞台に幕を開け、かつまた幕を閉じたのだから、この「島宮」が歴史劇の内実深く根ざすという一点だけは疑う余地がない。

それにしても、「島宮」と天皇とのかかわりについてさえ、手がかりが余りにも乏しい。天智紀以前の記述に拠る

かぎりとは、たとえば日本古典文学大系本『日本書紀下』の当該補注(586頁)の「蘇我馬子の邸宅(推古三十四年五月条)のあとに作られ、(中略)皇極天皇の母吉備姫王が吉備島皇祖母命、舒明天皇の母糠手姫皇女が島皇祖母命と呼ばれたのは、ここに住んでいたためか。」といった程度の説明にほとんど尽きる。これ以上は推測よりほかないが、たとえ天皇とのかかわりが明らかになったところで、壬申の乱をめぐっては、右に述べたようなその開幕と閉幕との場として島の地ないしその殿舎がまことにふさわしかったということだけは、恐らく揺らが<sup>10</sup>ない。そのかぎりでも、凱旋をあらわすはずの「詣<sup>11</sup>于倭京<sup>12</sup>而御<sup>13</sup>島宮<sup>14</sup>」は、同時に、天皇にとって「島宮」が倭京を象徴するいわばシンボルの意味をもつ場所であったことを示唆するであろう。

### 五、対比的な記述の構成——戦い準備の段階

この「島宮」を終始一貫して重視する姿勢は、翻って「近江京」に対する軽視あるいは無視と表裏する。壬申の乱じたい、全体を通しての展開上、攻撃を仕掛けてくる近江朝廷および軍を相手に、頭初の逃避から反攻に転じ、最後は撃滅して大友皇子を自死に追いやり、左右大臣ら罪人の逮捕、処罰をもつて幕を閉じる。近江朝廷の崩壊は、どこまでもこれらの結果にすぎないし、当初から打倒そのこ

とを目指したのではない。「近江京」の奪回なども、壬申の乱を通じて一度も戦略目標とはなっていない。

実際に、倭京こそが壬申の乱のいわば主戦場である。この攻防をつたえる記述がもつとも詳細かつ精彩を放つてもある。「島宮」が倭京のシンボルの意味をもつ以上、倭京の攻防は、「島宮」の確保をめざした戦いといった意味あい、それを明示してはいないけれども、おのずから帯びる。言いかえれば、「島宮」の確保に直結すればこそ、壬申の乱全体のなかでもとりわけ倭京の攻防をめぐる戦いを特筆大書したということ、この点がなによりも重要である。

もつとも、そうした関連を裏付ける記述がない弱みはどこまでもつきまとう。そこで、関連については後に改めて言及するとして、あくまで実証に徹するべく、まずは倭京の攻防をめぐる戦いを特筆大書したその実態を、所伝の展開にそくして可能な限り忠実に捉えてみることにする。倭京に関しては、戦いに至る以前から、それ以降につづく、というより終始一貫した基調ともいうべき特徴がある。すなわち、倭に本拠を置く大伴吹負の活躍に焦点を当てている点である。戦いの後半にそれがとりわけ際立ち、多くの記述を割いてもいるだけに、目をそちらに奪われがちだけれども、実際には開戦以前から顕著なあらわれをみせる。



それをつたえる記述は、天皇方および近江朝方の動向をつたえる記述に、いわば相即的な対応をもつ。三者のこの対応の基軸となるのが、もちろん天皇方の記述である。開戦を前に、天皇方の準備が着々と整う過程をつたえることに明らかに力点を置いている。すなわち、天皇のもとに高市皇子・大津皇子がそれぞれ從臣をひき連れあいついで馳せ参じ、また伊賀郡司は数百の衆を率いて、さらに伊勢国司も介や湯沐令らと共に帰参する。そして五百の軍衆をもって鈴鹿山道を塞ぐと共に、村国雄依が徵発した美濃の兵士三千人により不破道を塞ぐことにも成功する。また一方、東海軍や東山軍の徵発にも動く。

これに対して、近江朝方の動向は否定的側面だけが目立つ。当初から「近江朝聞」大皇弟入東国、其群臣悉懼、京内震動。或遁欲入東国、或退將匿山沢。」といった始末であるが、この混乱の描写にはもちろん誇張がある。こうした事態をうけた大友皇子の対応も、天皇方とは著しく対照的である。臣下の「遅謀將後。不如急聚驍騎、乘跡而逐之。」という進言に対する「皇子不從」は、天皇の不用意な東国入りを諫める臣下の言を容れた「天皇從之」とはまさに逆の対応であり、また一方、「興兵」のため派遣した先の吉備国、筑紫国、東国のいづれにおいても不手際あるいは失敗を演じている。戦いの準備を順調に

進める天皇方とは正反対のあり方を、対照的なかたちで強調する意図がそこには著しい。

この近江朝方の動向をつたえる記述の冒頭に、それが、対照的な天皇方の順調な動向と同時並行的に生起していることを示す「是時」を置く。吹負関連の記述を、この「是時」を承けるはずの「当是時」をもつて起こすことじたい、天皇方、近江朝方をひき継いでそれらと一連の内容をあらわすことを明示したものだつたに相違ない。吹負関連のその記述を次にしめす。

当是時、大伴連馬来田、弟吹負並見時否、以称病、退於倭家。然知其登嗣位者必所居吉野大皇弟上矣。是以、馬来田先從天皇、唯吹負留、謂「立名于一時、欲寧艱難。」即招一二族及諸豪傑、僅得數十人。

実際に、この一節の傍線部(1)にいう「時否」とは、近江朝方のいままさに直面している否定的な状況をさすであろう。また傍線部(2)にしても、天皇方の動向をつたえた記述の「即日(六月二十四日)、到菟田吾城」。大伴連馬来田、黄書造大伴從吉野宮追至。」をそれがさすことは明らかである。

しかし、この一節においては、むしろ傍線部(3)こそが天皇方、近江朝方の記述との一体的な関連にかかわって

重要である。既述のとおり天皇方と近江朝方とは、戦いの準備に正反対ともいふべき違いをみせるが、それにもかかわらず、準備することじたいは共通する。軍隊ないし兵士の動員や徴発などがその主な内容であり、これに対応するのが、右の一節の傍線部(3)にほかならない。三者の該当する記述を次に対比させてみる。

〔天皇方〕 当国郡司等、率<sup>二</sup>數百衆<sup>一</sup>歸焉／發<sup>二</sup>五百軍<sup>一</sup>、塞<sup>二</sup>鈴鹿山道<sup>一</sup>／發<sup>二</sup>美濃師三千人<sup>一</sup>、得<sup>二</sup>塞<sup>一</sup>不破道／發<sup>二</sup>東海軍<sup>一</sup>／發<sup>二</sup>東山軍<sup>一</sup>。(高市皇子、大津皇子、伊勢国司らの帰参がこれに加わる)

〔近江朝方〕 (東国、倭京、筑紫、吉備国にそれぞれ使者派遣し) 並悉令<sup>レ</sup>興<sup>レ</sup>兵。(全て不首尾に終る)

〔吹負〕 招<sup>二</sup>一二族及諸豪傑<sup>一</sup>。(僅かに数十人しか集まらない)

三者それぞれに戦いに備えて軍勢の拡張に躍起となつてゐる状況に照準を合わせ、前述のとおり全てが順調に進む天皇方の動向に関連して、それとは対照的な近江朝方の状況を組み合わせた上に、さらに吹負の動きをそれに続けるといったかたちをとる。集約していえば、あくまで天皇方の記述を基軸に、戦いの準備段階として一連の構成のもとに対比的に描いている。

## 六、対比的な記述の構成——開戦直前の段階

吹負関連の記述としては、ここまではなおいまだ萌芽的な段階にとどまる。天皇方、近江朝方の関連記述とは別の一つのまとまりから成るとはいつても、双方ともほとんど交渉がなく、しかもその活動の実態は、吹負の一人相撲にすぎない。行動の範囲も、吹負の「倭家」周辺を恐らくそれほど出てはいない。

次の段階に入ると、それが一変する。場所も倭京に移り、天皇方、近江朝方の双方に深いかわりをもつに至る。戦いの準備が整つていよいよ戦端が開かれようとする、いわば開戦直前がこの段階である。近江朝方の本営の動向をつたえる記述を欠くけれども、開戦直前のこぜりあいをめぐつて、近江朝方の動向が、それぞれ天皇方、吹負に深くかわるという共通したかたちをとる。

その近江朝方動向の発端が、戦いの準備段階をあらわす記述としてさきに挙げた〔近江朝方〕の「東国」と「倭京」への使者派遣である。六月二十七日、野上に到着した天皇を高市皇子は和髪から出迎え、近江朝方の「遣<sup>レ</sup>発<sup>二</sup>東国軍<sup>一</sup>」韋那公磐歟之徒」を捕えたことを報告する。天皇が、近江朝には共議する左右大臣や智謀の群臣がいるのに對して、今ここには共に事を計る者なく、幼い子供たちが

いるだけのこの状態をどうすればよいかと嘆くと、高市皇子は勇みたつて「(前略)頼神祇之靈、請天皇之命、引率諸將而征討。豈有距乎。」と応じる。これを天皇は誉め、励まして「因賜鞍馬、悉授軍事。」というように軍事を授ける。二十九日の「天皇往和覽、命高市皇子、号令軍衆。」は、実際に軍の指揮を高市皇子に委ねたこと、そしてこの時点でもはや戦う体制がすべて整ったことをものがたる。

この直後に、同じ二十九日にかけて「(是日)位置するの吹負に關連した記述である。すなわち、その日、留守司の高坂王および前述の戦い準備の段階に「以穗積臣百足・弟五百枝・物部首日向遣于倭京」とつたえていた「興兵使者」穗積臣百足らが飛鳥寺の西の槻のもとに設営していた軍営を、吹負が急襲する。事前に軍営内の漢直らが内応することを打ちあわせた上で、高市皇子の名を詐称して乗りこむといった周到な策略が奏功して、軍営はあつけなく陥落する。そして百足を殺す一方、同じ「興兵使者」として派遣された弟の五百枝と物部首日向とは赦して軍中に置き、また高坂王・稚狭王を軍に従わせると、吹負は使者を天皇のもとに遣してこの「事状」を報告させる。天皇は大いに喜び、「命吹負拜將軍」とあいなるわけだが、これによって三輪君高市麻呂や鴨君蝦夷らのほか、

豪傑も群をなして麾下に參集する。これらすべてを二十九日にかけて一まとまりの記述としてつたえ、最後を「撰衆中之英俊、為別將及軍監。」をもって結ぶ。かくして吹負の活躍により、天皇方と時を同じくして、倭京にあつても戦う体制が全く整ったことになる。

この吹負關連の記述が、基軸として位置する天皇方の記述との対応をもとに成りたつことは疑いをいれない。天皇方の記述にけつして見劣りしないばかりか、吹負らによるあざやかな軍営奪取劇はいっそう精彩を放つてもいる。それだけに、吹負らの活躍やその成果にもつぱら関心を寄せがちだけれども、そこだけに焦点を当てているわけでは恐らくない。

記述があくまで飛鳥寺の西の槻のもとに設営した軍営や小墾田の兵庫などに狭く限定した、すなわち倭京をめぐる展開し、ここを奪取した功績をもって吹負を將軍に任じたことじたい、天皇が倭京を格別に重視したことによるはずだから、見方をかえれば、吹負の活躍を通して、近江朝方から天皇方に倭京の支配が移行するその経緯をつたえているとみるのが可能であろう。そうしてみると、吹負が倭家に退いたあと兵を挙げようとした萌芽的な段階の「即招一二族及諸豪傑、僅得数十人。」といった状態から、吹負が將軍を拜命して「是時、三輪君高市麻呂、鴨君蝦夷

等及諸豪傑者、如響悉會「將軍麾下。」となつたこの變化も、吹負の將軍拜命を契機として、その触発や時勢の転変に依じて在地の豪族たちが立ち上り、吹負のもとにはせ参じたという倭京の新たな動きをつたえるものであつたろう。將軍を拜命した吹負に、後（七月九日「是日」の記述）にはあるが、「倭京將軍」という称号を冠するのは、その意味でも象徴的である。吹負は称号どおりやはりあくまでも倭京の將軍であり、言うならば、倭京が天皇にとつて命運にかかわる重大な意味をもち、そして倭京の奪取をなしとげる吹負こそがその命運を握る人物であるとして、挙兵の段階から焦点をあてていたに相違ない。

## 七、対比的な記述の構成——攻撃開始の段階

こうした所伝の展開から推して、吹負を將軍（この時点で、すでに「倭京將軍」としていればなおさら）に任じた天皇の意図は、吹負じしんがめざした「規襲近江」より、むしろ倭京の防衛にあつたことは疑いない。七月一日には、吹負はみずからの企てを実行すべく「初向乃樂」という第一歩を踏みだすが、翌二日、天皇はいよいよ総攻撃に着手し、そのまづ先に挙げるのが「天皇遣紀臣阿閉麻呂・多臣品治・三輪君子首・置始連菟、率數万衆、自伊勢大山越之向倭。」である。この倭に向けた

派遣を、同じ数の軍勢ながら、攻撃の主たる対象の「自不破出、直入近江」という近江への派遣に先行させていること自体、倭を近江に優先させたことを如実にものがたる。この倭の中心に、天皇は明らかに倭京を見すえていたはずである。

しかしながら、天皇は吹負を將軍に任じて、派遣はもとより、いかなる命令あるいは指示も彼に与えていない。密命や默契の類の存在を示唆してもいい以上、額面どおり受けとるとすれば、吹負は將軍を拜命したにもかかわらず、天皇の直接の指揮下に入らない、だから兵員・武器の支給もうけていないであろうから、実態はせいぜい自前の独立部隊を率いているに過ぎない。この行動の自由が、吹負に前述のとおり「規襲近江」という企てを促すことはむしろ自然でもある。

この自然な流れのまにまに所伝が展開するならば、「倭京將軍大伴吹負」はありえない。流れをおし止めたばかりか、もとに戻したのが側近の進言である。次の一節の傍線部がそれにあたる。

（七月三日）將軍吹負屯于乃樂山上。時、荒田尾直赤麻呂啓將軍曰「古京是本營処也。宜固守。」將軍從之、則遣赤麻呂・忌部首子人、令戍古京。このあと、古京に到つた赤麻呂らが道路の橋板を解体して

楯とし、京周辺の衢<sup>すけ</sup>に立てて防禦を固めた翌四日、ついに吹負は近江の將の大野果安と乃樂山で交戦する。敗れた吹負がかるうじて脱出すると、果安は追う。

(七月四日) 於是、果安追至三八口、企而視<sup>み</sup>京、每<sup>おほ</sup>街豎<sup>たて</sup>楯。疑<sup>おそ</sup>有<sup>あ</sup>伏兵、乃稍引還之。

最後は、赤麻呂の計略にまんまと乗せられて果安が軍を引いたというところで終る。七月三日四日と続くこれら一連の記述のかぎりでは、主題は、緒戦での近江方の優勢をつたえてはいてもそれではなく、側近の進言に従って防衛に赴かせた吹負のすばやい対応や実際に敵を欺いて守りぬいた赤麻呂のみごとな計略などを内容とする、すなわち古京の防衛そのことであろう。古京とは倭京にほかならないから、やはりここでも吹負と倭京とは不可分のかかわりにあり、防衛という主題もまた、この前の段階が主題とした奪取をひき継ぐものとみることができる。

もっとも、先行する前の段階をひき継ぐのは、構成も同様である。右に引用した一節のあとは、近江軍の敗北と瓦解、大友皇子の自縊や左右大臣以下の散亡にいたるまで、古京関連の記述は影を潜め、右掲の七月三日四日の一連のまとまりをもつ記述が最後にあたる。そしてこれが、七月二日付の基軸となる天皇方の記述と、「時」を介してそれをひき継ぐ近江朝方関連の記述との後に対比的に続く。

〔天皇方〕 天皇遣<sup>はな</sup>紀臣阿閉麻呂(以下、三名略)、率<sup>は</sup>数万衆、自<sup>より</sup>伊勢大山越之向<sup>むか</sup>倭。且遣<sup>またはな</sup>村国連男依(以下、三名略)、率<sup>は</sup>数万衆、自<sup>より</sup>不破出、直入<sup>すなはち</sup>近江。(中略)然後、別命<sup>また</sup>多臣品治、率<sup>は</sup>三千衆、屯<sup>とど</sup>于<sup>を</sup>荻萩野。遣<sup>はな</sup>田中臣足麻呂、令<sup>を</sup>守<sup>も</sup>倉歷道。

〔近江朝方〕 (右の記述の直後) 時、近江命<sup>みこと</sup>山部王(以下、二名略)、率<sup>は</sup>数万衆、将<sup>を</sup>襲<sup>せ</sup>不破而軍<sup>を</sup>于<sup>を</sup>犬上川浜。(以下、内紛により進軍不能)是時、近江將軍羽田公矢国、其子大人等率<sup>は</sup>己族、来降。(以下略)先是、近江放<sup>はな</sup>精兵、忽衝<sup>きつ</sup>玉倉部邑。則遣<sup>すなはち</sup>出雲臣狛、擊追之。

〔吹負〕 (右の記述の直後。以下104頁所引の記述へ繋がる。七月三日) 將軍吹負屯<sup>を</sup>于<sup>を</sup>乃樂山上。

三者を対比的につなげるこの構成が、所伝を成りたせる一定の型にのつとるものであることは、先行する二つの段階との類似に照らして明らかである。吹負関連の記述は、まさにこの型どおり古京(倭京)を中心に展開するかたちをとる。そのなかに赤麻呂のいう「古京是本宮処也」には、開戦直前の段階の倭京奪取をつたえたなかにいう「據<sup>と</sup>飛鳥寺西楓下<sup>を</sup>為<sup>を</sup>營」が対応するように、直前の段階の内容をひき継ぐかたちをもつて次の段階の記述が展開する点

もまた、確實に型にのつとる。

ちなみに、吹負関連の記述直後の七月五日以降、天皇方と近江方との本格的な交戦が始まるが、右に引用した天皇方の記述に対応するのは、近江朝方と吹負の各関連記述とを比べ越えたその七月五日以降の記述からである。すなわち天皇方の記述の「(中略) 然後」のあとにつたえる田中臣足麻呂が守る倉廩道を、近江の別將の田辺小隅は七月五日に攻撃し、その直前につたえる多臣品治が三千の衆を率いて駐屯する荊萩野を、倉廩道での戦いに勝利したその余勢を駆って小隅は翌六日に急襲する。さらに(中略) 直前につたえる村国連男依に関しては、七日に近江軍と戦ってこれを撃破したあと、ひき続いて近江軍をうち破って追いつめていく。天皇方の記述に、こうしてあたかもそれを逆にたどるかのように対応する七月五日以降の記述に対して、そうした対応をほとんどたないというそのことにおいても、近江朝方と吹負の各関連記述がたがいにあい通じ、あい連なる関係にあることは明らかである。

#### 八、不破の天皇に対する倭京の吹負

さて、吹負関連の記述、といつてもあくまで倭京(古京)を中心に展開するその限定にそくしてもはや倭京関連の記述と言いかえたほうが適切だし、段階を追ってその

あらわれが次第に鮮明の度合を増す展開にもげんになっている。天皇方の記述を基軸とし、それに対比的に連なるかたちで、近江朝方の記述と共に、あるいは単独に倭京方の記述として成りたつていたということにほかならない。段階を追ってこの対比的な連なりをつみ重ねる手法は、各方面の同時進行的な動向を比較しながら見わたすことができる利点はあつても、戦いの進展に伴い、各方面の動向が交わり、輻輳してくれば、おのずから破綻せざるをえない。前述のとおり七月四日の倭京方の記述以降、その手法を採っていない、それが最大の理由であらう。

手法を変えたあとでは、上述のとおり天皇方の村国男依が近江方面軍を率いて近江朝軍を次々にうち破り、ついには近江朝を壊滅させるまでを日を追ってつたえる一連の記述が続く。倭京に関連した記述は、この直後に位置する。段階を追った記述ではないから、すなわちそのかたちをとる記述の制約から自由だったからであろうが、男依らの破竹の勢いの進撃をつたえる記述とは、型どおりの対比的な連なりの関係にはない。内容も独自であり、次のように近江への進軍を開始した当初まで溯ったところから記述が始まる。

初將軍吹負向「乃樂」至「裨田」之日、有「人」曰「自「河内」軍多至。」則遣「坂本臣財」(以下、四名略)、「率」

三百軍士<sup>一</sup>、距<sup>二</sup>於龍田<sup>一</sup>。復遣<sup>三</sup>佐味君少麻呂<sup>一</sup>、率<sup>二</sup>數百人<sup>一</sup>、屯<sup>二</sup>大坂<sup>一</sup>。遣<sup>三</sup>鴨君蝦夷<sup>一</sup>、率<sup>二</sup>數百人<sup>一</sup>、守<sup>二</sup>石手道<sup>一</sup>。

この冒頭は、開戦直前の段階にあたる前掲記述の「乃規<sup>レ</sup>襲<sup>二</sup>近江<sup>一</sup>。撰<sup>二</sup>衆中之英俊<sup>一</sup>、為<sup>二</sup>別將及軍監<sup>一</sup>。庚寅（七月一日）、初向<sup>二</sup>乃樂<sup>一</sup>。」という最後を明確にひき継ぐ。

また一方、七月一日のその「初向<sup>二</sup>乃樂<sup>一</sup>」の直後には、七月二日の前掲「天皇方」の各方面軍派遣の記述が位置している。したがって七月一日の「初向<sup>二</sup>乃樂<sup>一</sup>」に対して、基軸の天皇方記述がその直後に位置する一方、右に引用した記述が直接それをひき継ぐといった対応をもつ。

さらに内容の上でも、天皇が近江から攻めてくる敵に向け各方面に数多くの将兵を派遣すると同様、吹負もまた河内から来襲する敵に備え兵を率いた側近を派遣する。しかもそれら基本となる表現にくわえ、細部にいたるまで、かりに人名地名を除いてしめせば、次のように両者の間にはほとんど違いがない。

〔天皇方〕 然後、別命<sup>二</sup>（人名）<sup>一</sup>、率<sup>二</sup>三千衆<sup>一</sup>、屯<sup>二</sup>（地名）<sup>一</sup>。遣<sup>二</sup>（人名）<sup>一</sup>、令<sup>レ</sup>守<sup>二</sup>（地名）<sup>一</sup>。  
〔吹負〕 復遣<sup>二</sup>（人名）<sup>一</sup>、率<sup>二</sup>數百人<sup>一</sup>、屯<sup>二</sup>（地名）<sup>一</sup>。  
遣<sup>二</sup>（人名）<sup>一</sup>、率<sup>二</sup>數百人<sup>一</sup>、守<sup>二</sup>（地名）<sup>一</sup>。

この表現の細部にいたるまでの一致は、もとより偶然の結果

果ではなく、後出の「吹負」が「天皇方」に記述全体を対応させたことによるはずである。そのねらいはいえ、各方面への将兵の派遣に始まる戦いの一部始終を、天皇方と同じように倭京を中心とした地域でもつたえようとしたところにあったものとみるのが自然であろう。さればこそ、「初」という近江への進攻を開始した当初まで記述を溯らせることも必要だったに相違ない。

## 九、倭京を本営とする防衛戦

つきつめれば、吹負と倭京という不可分のかかわりをもつ二つ、具体的には倭京を主な舞台とする吹負の活躍を中心に所伝は展開する。天皇方、近江朝方との連なりのなかで段階的につみ重ねてきた記述の、まぎれもなくその延長上に位置するわけだが、戦いの一部始終をまとめてつたえることに伴い、所詮は付随的ではない先行段階の記述に較べ、はるかに入りくんだ様相を呈し、かつ多彩でもあるそれでも、しかし根幹をなす部分は、先行段階の記述を明らかにひき継いでいる。

すなわち、戦場が倭の広汎な地域に拡大はしても、吹負は倭京を本営とし、次のようにここを戦いの拠点とする姿勢を終始変えない。

（甲） 將軍更還<sup>二</sup>本營<sup>一</sup>。

(乙) 近江將犬養連五十君(中略)遣別將廬井造鯨、率二百精兵、衝將軍宮。

(丙) 將軍亦更還本処、而軍之。

最後の(丙)の直後には「自此以後、近江軍遂不至。」という一文がつづき、倭方面をめぐる戦いが終息したことをつたえる。ここに至るまで、結局、前述(104頁)のとおり「古京是本宮処也。宜固守。」という荒田尾赤麻呂の進言に従い、この倭京の本宮を拠点に戦いを続けていたということだから、倭京はもとより、倭で戦う目的とは、吹負にとつてはあくまで倭京の防衛にある。

倭京の防衛という明確な目的をもつ吹負の戦いをめぐって所伝が展開するものとすれば、吹負が戦いをおしていかに倭京を防衛しおせたかに、所伝の主題を求めることができる。そしてこの主題のもとに、構成や内容にもおよぶ意図をもって所伝を成りたてていたとみるのが恐らく自然である。げんに、この見方を裏づける徴候がいくつかある。

まず第一に、所伝の冒頭の「初」に関するものであるがこの語の使いかたは、実はなかなか特異である。類例があるので、次にいくつかその例をしめす。

○卅一年秋八月、詔群卿曰「官船名枯野者、伊豆国所貢之船也。(以下略)」。群卿便被詔、以令

有司、取其船材、為薪而焼塩。於是得五百籠塩。則施之周賜諸国。因令造船。是以、諸国一時貢上五百船。悉集於武庫水門。(応神天皇条)

この船が新羅の調使の停泊しているところから失火した火災により焼けてしまう。そこで新羅人を責めると、聞いて大いに驚いた新羅王は「能匠者」を貢り、これが猪名部等の始祖であることつたえた直後にいう。

初枯野船為塩薪焼之日、有余燼。則奇其不焼而献之。天皇異以令作琴。

この琴の音の「鏗鏘而遠聆」に感じ入った天皇が歌を詠み、その歌をもって所伝を結ぶ。さきに引用した所伝の傍線部にいう枯野の船を焼いたというところまでさかのぼることをあらわすのが「初」である。そしてその枯野という船の焼け残り材をめぐって、新たにいわば怪異譚ともいえるべきまとまった内容の所伝として成り立っている。

こうした先行所伝の一節をめぐって別の新たな所伝が成りたつという点では、次の例もまた同様である。

○是歳、新羅伐任那。任那付新羅。於是、天皇将討新羅、謀及大臣、詢于群卿。(以下略)則不果征焉。爰遣吉士磐金於新羅、遣吉士倉下於任那、令問任那之事。(推古天皇三十一年)



傍線部にいう磐金らの新羅派遣時点までさかのぼり、その派遣された磐金をめぐって次のように別の新たな所伝が始まる。

初磐金等度<sup>ニ</sup>新羅<sup>ニ</sup>之<sup>レ</sup>日、比<sup>レ</sup>及<sup>ニ</sup>津、莊船一艘迎<sup>ニ</sup>於海浦<sup>ニ</sup>。磐金問之曰「是船者何国迎船。」対曰「新羅船也。」磐金亦曰「曷無<sup>ニ</sup>任那之迎船<sup>ニ</sup>。」

磐金のこの強圧的な言葉によって直ちに「更為<sup>ニ</sup>任那<sup>ニ</sup>加<sup>ニ</sup>一船<sup>ニ</sup>」とつたえ、この直後に「其新羅以<sup>ニ</sup>迎船二艘<sup>ニ</sup>、始<sup>ニ</sup>于是時<sup>ニ</sup>歟。」というようにこの所伝は起源譚として成りたつ。

とりあげた類例のうち、前者は枯野の焼け残り材、後者は磐金というようにそれぞれ先行所伝の一節がつたえる明確な対象にどこまでもそくして、しかも最後までそれに限定的に所伝が展開するというのが、該当する例に共通した特徴である。くだんの所伝も、「初將軍向<sup>ニ</sup>乃楽<sup>ニ</sup>至<sup>ニ</sup>稗田<sup>ニ</sup>之日<sup>ニ</sup>」を、先行所伝の一節の「庚寅（七月一日）、初向<sup>ニ</sup>乃楽<sup>ニ</sup>」にさかのぼり、これに対応させていることは明らかである。当然、類例にいう対象には吹負があたる。そしてげんに類例どおり吹負の活躍に終始焦点を当てて展開するかたちを所伝がとっている以上、類例がそうであるように、いわば一つの譚として意図的に所伝を成りたたせているとみるのが筋である。

## 十、神懸りと戦いと対応、その一

「初」に関連した特徴は、しかしなお取っ掛かりにすぎない。それでも、所伝そのものが意図の関与によって成りたつことを推測させる十分な手懸りとなるであろう。実際、「初」に始まり、「自此以後、近江軍遂不<sup>レ</sup>至。」をもって終息する倭京防衛の吹負を中心とした戦いには、二つの山場がある、というより、実質的にはその二つの山場をめぐって展開するというのが所伝構成上の基本的なかたちである。二つの山場のそのそれぞれの終結には、同じ倭京の本営への吹負の帰還をつたえる、すなわち前掲（107、108頁）の（甲）と（丙）があたる。

もつとも、山場の始まりは必ずしも明確ではない。戦況に応じて、さまざまな契機あるいは発端があるほうがむしろ自然でもあるが、実は二つの山場にはその始まりに共通する点がある。神が敵軍の来襲を事前に教示するというそのことである。倭京防衛の戦いの終結をつたえた記述の直後に、二つの山場に対応するその神の教示をめぐるひとまとまりの記述がつづく。直後の記述は、前出（以下、これを〈前段〉と表示）の山場に対応する次の一節である。

（一）先是、軍<sup>ニ</sup>金綱井<sup>ニ</sup>之時、高市郡大領高市県主許梅、儼忽口閉而不<sup>レ</sup>能<sup>レ</sup>言也。三日之後、方着<sup>ニ</sup>神以

言「吾者高市社所居、名事代主神。又身狹社所居、名生靈神者也。」(以下略)且言「自西道軍衆將至之、宜慎也。」言訖則醒矣。(以下略)又捧幣而礼「祭高市・身狹二社之神」。然後、壹伎史韓國、自大坂来。

高市郡の大領である高市県主、許梅に神が憑依して神意を伝えたという伝承だが、冒頭に「先是」という「是」が戦いの終結を指し、その上さらに「軍金綱井之時」と明示しているとおり、吹負が近江軍に敗れた挙句にわずかな騎兵をしたがえて逃げる途中、救援のため千余騎を率いてかけつけた置始連菟の軍に逢った以降をつたえる次の記述に、それぞれ(a)(b)(c)ともに対応をもつ。

(吹負)逮于墨坂、遇逢菟軍至。更還屯金綱井而招聚散卒。於是、聞近江軍至自大坂道而將軍引軍如西。到当麻衝、与壹伎史韓國軍戰葦池側。

対応が明らかな上に、まさに神懸りした許梅の口を借りて伝えた神の教示どおり事態が動いたことを、前掲(一)の(c)の直後ににつづけ、わざわざ「故、時人曰、二社神所教之辞、適是也。」という時人の言のかたちをとって明確にかたつてもいる。

〈前段〉の山場とは、右の一節の(c)につたえる韓国

との戦いをいう。倭の攻防をめぐる緒戦では、この近江軍の將が圧倒的に優位に立つ。吹負が派遣した坂本臣財らを蹴散らし(「与韓國戰于河西。財等衆少、不能距。」)、天皇側に寝返りをはかって軍衆を集めていた河内国司守、来目臣塩籠を自死に迫りやり(「爰韓國到之、密聞其謀而將殺塩籠。塩籠知事漏、乃自死焉。」)、この韓国の破竹の勢いに乗じた近江軍の進攻の前に吹負方は総崩れとなる(「近江軍当諸道而多至。即並不能相戰以解退。」)。近江方のこうした優勢な状況のなかで、敗走した吹負に菟の援軍が加わったとはいえ依然として劣勢を挽回できなかったはずだから、神が許梅の口をとおして助言を与えた、吹負じしんはそれと気付かないまま、つまり陰ながらまさに神が加勢・助力したものとみるべきであろう。当然、これを機に形勢は逆転する。その形勢逆転の、戦局でいえば転換点となる戦いが、実は〈前段〉の山場にほかならない。

〈後段〉の山場をめぐるでも、その前段階を含めほとんど同じ展開をたどる。前掲(一)の記述に、次の(二)の記述が一連のものとして続く。ただし、〈後段〉の山場に対応して、助力する神もその神意の発現時も異なる。

(二)又村屋神着祝曰「今自吾社中道軍衆將至。故、宜塞社中道。」故、未經幾日、廬井造鯨

## 軍自「中道」至。

神懸りやそれを通して神が教示を下すことはもとより、その内容をあらわす（b）（c）をめぐることは表現にいたるまで、（一）とは相似する。時人の言を、やはり神の教示の真实性を確認する裏付けのため、右の一節の直後に「時人曰、即神所教之辞是也。」と付加している点も、これまた（一）に通じる。

もちろん、そのなかにいう（a）（c）は、吹負の戦いをつたえる記述に対応をもつ。吹負の置かれた状況は、（一）と同じように、というよりそれ以上に切羽詰まっている。次がそれをつたえる記述である。

時、東師頻多臻。則分軍、各当「上中下道」而屯之。

唯將軍吹負親当「中道」。於「是」、近江將犬養連五十君

自「中道」至之、留「村屋」而遣「別將廬井造鯨」、率「二百精兵」、衝「將軍營」。當時、麾下軍少、以不能「距」。

（a）と（b）の順序は逆転しているけれども、この（a）の「村屋」において（二）の（a）という神懸りに「村屋神着」祝曰」が起き、また一方（b）同士たがいに対応をもつことも明らかだから、右の記述がつたえるなかに、（一）同様に神懸りが介在することを想定すべきであろう。

さて、しかしそれをどこと特定するとなると、けっして

容易ではない。右の記述では、（b）以外に、吹負についても「親当「中道」」とつたえている。神懸りを通して神が教示した「宜塞「社中道」」に従ってそうした行動に出たことも、もちろん考えうる。そこで、さしあたり吹負の行動が神懸りに基づくのか否かといった点に問題を絞って「親当「中道」」という「中道」は、「上中下道」の一つに過ぎず、神が教示のなかで繰りかえし強調する「吾社中道」「社中道」ほどの限定を伴うものではない。それらは、むしろ近江の將の五十君による、前掲一節の（b）（a）（c）の順につたえる一連の「自「中道」至之、留「村屋」而遣「別將廬井造鯨」、という行動に対応する。したがって所伝の展開上も、前掲一節の最後に「麾下軍少、以不能「距。」とつたえるのとおり、東道軍の分屯したなかでは「唯將軍吹負親当「中道」。」という吹負の率いる部隊は兵卒の数も少なく、まさにこの防備の手薄な部分にねらいを定めて近江將の五十君は廬井造鯨に襲撃を命じたものとみるのが自然である。

それだけに、吹負にとって危機も大きくならざるを得ない。この危機を予知すればこそ、神は神懸りを通して教示を下した、すなわち（一）がそうであったように陰ながら加勢・助言したものとみることができる。そして次の山場

にいたつて、これも（一）と同様に形勢が逆転する。こうして（二）とは、さながら相似ともいふべき対応関係にあるながら、神懸りが吹負の戦いにどう介在したのかについては、推測する手懸りすら欠くというのが実態である。

## 十一、戦局を転換する勇者の活躍

それは、しかし（一）との違いというより、（二）でさえ、神懸りとの関係を示唆するのはたかだか前掲記述の（b）「聞近江軍至<sub>レ</sub>自<sub>二</sub>大坂道<sub>一</sub>」というわずかの一節だけなのだから、実は五十歩百歩といった程度にすぎない。あい通じるその互いの結びつきの核心でさえあるが、かえって（二）のほうに神懸りの本質はあからさまである。すなわち、吹負の戦いにとつて、勝敗を分けるほど決定的な意味をもつものではなく、だからこそあくまでも敵の襲来情報とごく簡単な対応策とを教示するだけにとどまり、戦いにそれがどのように介在、寄与したかについてさえ明らかに示すまでもなかったのであろう。むしろ、吹負が危機に陥るそのつど、倭京の防衛という戦いの目的にそくした教示を下すことを通して、倭京の防衛が神じしんの意志でもあったことを示すねらいがそれには著しい。

戦いじたいについていえば、主役はどこまでも人間である。そして〈前段〉・〈後段〉とも、その活躍に山場を設定

している。前節に指摘した危機的状况を承け、そのなかでまさに決死の奮戦が形勢を逆転させるさまをともにつたえる。

### 〈前段〉——対韓国軍戦

時有<sub>二</sub>勇士来目者<sub>一</sub>。拔<sub>レ</sub>刀急馳、直入<sub>二</sub>軍中<sub>一</sub>。騎士繼<sub>レ</sub>踵而進之。則近江軍悉走之。

### 〈後段〉——対鯨軍戦

爰有<sub>二</sub>大井寺奴、名徳麻呂等五人<sub>一</sub>、從<sub>レ</sub>軍。即徳麻呂等為<sub>二</sub>先鋒<sub>一</sub>以進射之。鯨軍不<sub>レ</sub>能進。

活躍の主が、吹負でも、麾下の将でもなく、来目なる者や寺奴でしかなく、敵軍に突撃を敢行して突破口を開き、ついに近江軍を撃退するところまで、たがいにあい似たかたちをとる。

二つの段は、偶然の結果にしては余りにも似すぎている。しかもまたこれ以降の展開のなかにさえ、著しい類同をみせる。その部分に限って、次に抜き出してみる。

### 〈前段〉——韓国对勇士来目

近江軍悉走之。追斬甚多。（中略）於是、韓国離<sub>レ</sub>軍独逃也。将军遥見之、令<sub>二</sub>来目<sub>一</sub>以俾射。然不<sub>レ</sub>中而遂走得<sub>レ</sub>逸焉。将军更還<sub>二</sub>本营<sub>一</sub>。

### 〈後段〉——鯨对甲斐勇者

鯨軍悉解走、多殺<sub>二</sub>士卒<sub>一</sub>。鯨乘<sub>二</sub>白馬<sub>一</sub>以逃之。

(中略)則將軍吹負謂「甲斐勇者」曰「其乘「白馬」者、廬井鯨也。急追以進射。」(中略)即馳之得脱。將軍亦更還「本処」而軍之。

〈前段〉・〈後段〉ともに、それぞれ韓國軍・鯨軍を撃退したあとを承け、敗走する韓國・鯨しんを追いつめながら、最後は逃げきられてしまふといった内容をあらわす。かつて吹負方を脅かした敵將と、吹負の命をうけた勇者(勇士)とが、追う者と追われる者という立場で直接あい対する点も、やはり共通する。そして極めつきが、最後に位置する傍線部の一節である。

さきに言及したとおり(107頁)、吹負は倭京に軍の本営を置き、ここを拠点に戦っていたのであり、この本営に帰還することを傍線部の一節という。敵將が逃げのびたことを承けるかたちを前・後段ともにとると、この申し合わせたような一致は、もはや意図によるといふ以外には考えがたい。内容にそくしていえば、逃げのびたということは、状況に照らして、深追いしないことだから、敵將の首を獲るよりなにより、倭京の防衛を専らとしていたことを強調する意味あいがつよい。

そうである以上、所伝の展開を逆にたどって、敵將を逃げのびさせたことにつながる、たとえば勇者に敵將の射を命じたこと、またあるいは敵將の敗走、はては近江軍の敗

退にいたるまで、吹負による倭京の防衛という所伝の主題にそくして継起的に場面を連ねて成りたつものとみなすのが恐らくもつとも自然である。神懸りも例外ではなく、戦いに直接的なかわりをもたないことに加え、戦いのいわば外伝としてのその性格にかんがみて、神懸かりを、むしろ主題を強調すべくそれにそくした内容のものとしてつけ加えた可能性も否めない。

## 十二、神懸りと戦いとの対応、その二

最後に、そのことに関連する用例をもう一つとりあげてみるに、すでに言及したとおり二回あった神懸りのうち、一回目のものが、高市県主の許梅の身に起こる。それをつたえる記述を(一)としてさきに引用しているが(109頁)、そのなかでは省略した(以下略)の部分の次の一節がとりわけ重要な意味をもつ。

便亦言「吾者立皇御孫命之前後、以送奉于不破」而還焉。今且立「官軍中」而守護之。」

ここにいう「吾」とは、前掲記述に「吾者高市社所居、名事代主神。又身狭社所居、名生靈神者也。」という事代主神と生靈神である。この二神のいうところも、既述の神懸りの教示と同じくそれと明らかに該当する内容をあらわす記述は特定できないけれども(実際、そうした記述は

ないはずだが）、対応する記述は確かにある。

まずは傍線部の（A）だが、開戦を前に不破入りした天皇をめぐる「丁亥（六月二十七日）、高市皇子遣使於桑名郡家以奏言、遠居御所、行政不便。宜御近处。即日、天皇留皇后而入不破。」という一節が、内容上それに対応するであろう。上述のとおり吹負が倭の近江軍の陣営攻略の戦果を報じた先も、この「不破宮」である。吉野からの逃避行の果てによりやく落ち着き、戦いを終えた後まで天皇はここを動かないことを、（A）の「送奉于不破」は暗に予定するはずである。

一方の（B）には、そうした対応を手繰りよせる確かな糸口がない。しかし（A）とは、「立」を共有する上に、「送奉」（A）に「守護」（B）が対応するなど、表現が合い通い、それが（A）と同じく天皇を対象とすることは明らかである。「今且も、（A）にいう「送奉于不破」以降、今も（B）の行為が続いていることを強調する表現であるから、不破入り以降の天皇を軍中にあつて守護するというこの（B）には、恐らく次の記述が対応する。

天皇於茲行宮興野上而居焉。此夜、雷電雨甚。天皇祈之曰「天神地祇扶朕者、雷電息矣。」言訖、即雷雨止之。

いわゆる祈いをめぐる一節であり、祈いどおり雷雨が止ん

だことにより、「天神地祇扶朕」の実現を天皇は確信するに至る。もちろん、かの神懸りの事代主神と生靈神という二神も「天神地祇」にあたる。この二神の「立官軍中而守護之」こそ、天皇が確信した「天神地祇扶朕」のまさに具体的なかたちをあらわす。

念のため言いさえれば、そのことの傍証となるのが、ほかならぬ祈いじたいである。祈いのあらわれない事態はけつして一様ではなく、またここにそれを論じる余裕もないが、日本書紀にひとまず限定した上で、くだんの例に通じる戦い関連の他の用例と比べた場合、通常の例に外れる点がある。

（1）時、椎根津彦乃祈之曰「我皇当能定此国者、行路自通。如不能者、賊必防禦。」（神武天皇即位前紀戊午年九月条）

（2）天皇又因祈曰「吾今当以八十平瓮、無水造飴。飴成、則吾必不假鋒刃之威、坐平天下。」（同前）

（3）又祈之曰「吾今当以嚴瓮、沈于丹生之川。如魚無大小、悉醉而流、譬猶被葉之浮流者、吾必能定此国。如其不爾、終無所成。」（同前）

（4）天皇於茲執矛、祈之曰「必遇其佳人、道路

見瑞。」(垂仁天皇三十四年三月条)

(5) 天皇祈之曰「朕得滅土蜘蛛者、將殲茲石、如柏葉而拳焉。」(景行天皇十二年十月)

(6) (皇后)登河中石上而投鉤、祈之曰「朕西欲求財國。若有成事者、河魚飲鉤。」(神功皇后摂政前紀四月条)

(7) 時、磐坂王・忍熊王共出菟餓野而祈狩之曰「若有成事、必獲良獸也。」(神功皇后摂政元年二月条)

祈いのかたちや内容に違いはあつても、祈いをおこなう当人にとつて望ましい事態が起こるか否かを判定する点は、どれにも共通する。その点はくだんの例も同じだが、もう一つの点、すなわち国あるいは天下の平定、佳人との遭遇、土蜘蛛の誅滅・事の成就などといった望ましい事態を、祈いをおこなう当人じしんが成しとげるものとする点は、右掲の例だけにあてはまる。くだんの例の「天神地祇扶朕」は、祈いをおこなう天皇の行為ならぬ、まさしく神の扶助にほかならない。

通常のかたちを外れてはいても、誤用とまではいえない。それどころか、文脈上むしろ然るべきかたちをとっているはずだが、その然るべきかたちこそ、神懸りにいう「立官軍中而守護之」との対応の必要が作りあげたものだった。

たに相違ない。そしてその対応そのものは、倭京の防衛をめぐる吹負の戦いのなかの、〈前段〉・〈後段〉のそれぞれにもった同じ神懸りととの対応に明らかに通じてもいる。

### 十三、壬申の乱をめぐる所伝の構成

神懸りをめぐつて、天皇の不破における祈いにそれが対応をもつことが、吹負の戦いに関連したそれとの対応に通じているというこのことは、一つの推測を誘う。すなわち、対応をもつというだけにとどまらず、対応のありかたそのものに至るまで、両者はあい通じるのではないかと。たがいに通じあつていれば、当然そうしたあらわれをみせるはずでもある。

さて、そこで神懸りに対応する記述をふり返るに先立ち、神懸りじたいに目を向けてみるに、吹負の戦いにおいては、さきに指摘したとおり前段(二)は劣勢な状態、後段(二)は切羽詰まった状況というように神の助言・教示を必要とするなかで、あたかもそれに応じるかのように神懸りが対応をもつ。天皇のばあい、不破にそれほどさし迫った危機はない。しかし、天皇の認識はそれとは違う。

既而天皇謂高市皇子曰「其近江朝、左右大臣及智謀群臣共定議。今朕無与計事者。唯有幼少孺子耳。奈之何。」

天皇のこの言葉に高市皇子は奮い立ち、近江軍など恐るるに足らずと勇んで答える。天皇は高市皇子を誉めて「慎不<sup>レ</sup>可<sup>レ</sup>怠」と言葉をかけるが、右に引用した一節の傍線部にいう天皇の不安・懸念がたとえ高市皇子に向けた励ましの意図によるものではあつても、現実とまったくかけ離れてはいなかつたであらう。そしてまさにこの当日の「此夜、雷電雨甚」というなかで、祈いを行う。不安や懸念があれど、それを行つたとみるのが、祈いの本来のありかたに照らしても自然であり、祈いによって「天神地祇扶<sup>レ</sup>朕」を確認したのだから、そうした神々の扶助を必要とするなかで、それに応えたことになる。

この祈いに神懸りが対応する。こうして神懸りに対応をもつ事態ないし状況にあつては、神懸りにいう助言や教示、あるいは扶助を必要とするという共通の構造をもつ。しかも、実際にはその助言などが顕著な効果、結果をもたらすものではないという点まで一致する以上、神助ならぬ人力とりわけ勇者（士）の果敢な活躍が難局を打開するといふ吹負の戦いの〈前段〉・〈後段〉に共通するこのありかたを、天皇の不破においても想定するのが筋である。げんに、祈いの日から中一日置いた六月二十九日、吹負は英雄さながらの活躍によつて倭京の奪取に成功する。その報告を受けた天皇は、大いに喜んで吹負を將軍に任じる。吹負の功績

は、直接には近江方から倭京を奪いかえたことだが、しかし、それとあわせて、天皇の直面していた難局突破の風穴を開けたことに求めることも、吹負の戦いにおける勇者の活躍にそれが確実にあい通じることには照らして、あなたが無理ではないであらう。

もっとも、吹負による倭京の奪取をめぐる記述そのものは、天皇に関連した基軸となる記述に付随する記述という性格をみずからの身上とする。難局突破の風穴を開けるものだとはいつても、だから、そのことだけに意味を限定することはできない。反面、たとえ波及的ないし付加的だつたにせよ、そうした意味をもつことを否定しざることも、これまたできない。たとえば倭京奪取に関連して、その功績をもつて天皇が吹負を將軍に任じた結果、いわばその波及効果を「是時、三輪君高市麻呂・鴨君蝦夷等及群豪傑者、如<sup>レ</sup>響悉会<sup>二</sup>將軍麾下<sup>一</sup>。」とつたえる。倭京奪取の結果が難局にある天皇に大いなる光明をもたらしたとみるほうが、むしろ自然である。

それが勇者の活躍に通じることを始め、不破を中心とした天皇関連の記述が、倭の戦いをめぐる吹負関連記述に対応し、あい重なることはもはや明らかであらう。両者を重ねあわせてみると、その中心に神懸りが位置する。次に、所伝の展開にそくして両者の対応を図式化して示す。



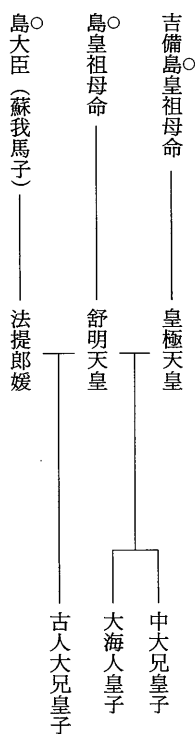


そうしてこの後の即位や王権そのものを正当化することにもつながる。

劇作りの意図は、ここにあらさまである。歴史をありのままつたえているといった見方とは、必然的にあい容れない。小稿の冒頭に採りあげた先学の説の成りたつ余地も、少なくともここにはあり得ないのではなからうか。

## 注

- (1) 北山茂夫氏『天武朝』（中公新書・506。128頁。一九七八年六月）
- (2) 直木孝次郎氏『壬申の乱』（増補版。塙選書13。一九九二年一二月）
- (3) 西郷信綱氏『壬申紀を読む』（平凡社選書148。一九九三年六月）



- (4) 『書紀集解』（四。1687頁。臨川書店。昭和四十四年九月）の指摘に始まり、小島憲之氏『上代日本文学と中国文学』（上。475頁。塙書房。昭和四十六年十月再版）に若干の説明がある。
- (5) 倉野憲司氏『古事記全註釈』（第一巻序文篇。122頁以下。三省堂。昭和四十八年十二月）に詳細な説明がある。
- (6) この一節が「隋書・高祖紀」に拠ることを、注(4)『書紀集解』（四。912頁）が指摘する。
- (7) 壬申の乱の開戦後の近江方動向をつたえるなかに、もう一つ「是時、河内国司守来目臣塩籠有下婦於不破宮之情上」という天皇ないし天皇方を指す例がある。
- (8) 西郷氏注(3)前掲書は直木氏の説を退け、「討手の追撃を恐れたというより、後に見るとおり吉野に入る日付を気にしての強行であつたらしい。」(34頁)と説くが、吉野入りの日付では、わざわざ「御島宮」とする説明にはならない。
- (9) 推測にすぎないことを断つ上でいえば、次の系譜に明らかたとおり、島は父祖ゆかりの地であり、島大臣を父にもつ

法提郎媛を、古人大兄皇子は母とする關係上、とりわけ深いかかわりがその地にあつたのではないか。古人大兄皇子といえ、天皇に推挙された折、辞讓して「臣願出家、入<sub>二</sub>于吉野<sub>一</sub>。勤<sub>二</sub>修仏道<sub>一</sub>、奉<sub>二</sub>祐天皇<sub>一</sub>」と願ひ出たのち、吉備笠臣垂による「吉野古人皇子与<sub>二</sub>蘇我田口臣川堀等<sub>一</sub>謀反。」という讒言を利用した中大兄皇子に討たれた悲劇の人物だが（以上、孝德天皇即位前紀から大化元年九月まで）、大海人皇子が殺されるとすれば、ほとんどこの古人大兄皇子の悲劇に重なる。皇子の轍を踏まないという覚悟を固めると共に、かの近江朝廷を完全に断ち切る上に、父祖ゆかりの地をあえて選んだのではなからうか。

(10)

むしろこうじ・みのる氏『日本書紀』のいくさがたり

(一) — 壬申の乱を例として — (横田健一編『日本書紀研究』第九冊。塙書房。昭和五十一年六月) は、近江京を辞去した天皇を宇治まで送った氏名を「左大臣蘇賀赤兄・右大臣中臣金・大納言蘇賀果安」と克明にあげていることと、卷二八の卷末に「これらの人々がことごとくその子にいたるまで処刑されたという記事のある」こととの間に「ひとつのいみ」を認め、『天武紀』がただ年次をおった公式の記録というだけでなく、壬申の乱を主題として首尾照応したひとつの文学的な構成を志向していることを感じさせる」(369頁)と説く。蘇賀果安は自死、「処刑」が実は「配流」であるといった事実誤認はともかく、「首尾照応」の指摘は示唆に富む。ただし、そう決めつけているだけの印象もまた否めない。その内実の分析を欠けば、「文学的な構成」にしても、説得力などもち得ない。

(11)

拙稿『うけひ』を論じて『日本書紀』神代上第六段の所

伝のなりたちに及ぶ」(京都語文<sub>二</sub>第七号<sub>一</sub>。佛教大学国語国文学会。二〇〇一年五月)のなかに、「うけひ」の各用例に考察を加えている。

〔付記〕小稿は、二〇〇五年四月開催の日本書紀研究会の例会で発表した素案を基にまとめたものです。例会では、直木孝次郎氏はじめ会員の方々に貴重な御意見を賜った。それらを十分生かしかれたとは言えないが、ここに記して感謝の意を表する次第です。